アパレル工業新聞　平成26年9月18日

サンプル開発機能を強化

欧州ブランドの拡大で

マッコーニホールディングス

今秋からベトナム生産開始

欧米と日本市場の中高級婦人服を生産しているマッコーニホールディングス（東京）は、中国・江蘇省にある主力生産拠点の蘇州マッコーニが欧州ブランド向けに構築したサンプル企画・開発機能を強化している。H&Mのアッパーライン「COS」に続いて、一年前からマックスマーラの主力ブランドである「マック&コー」、「ペニーブラック」もサンプル開発から量産まで一貫した取り組みが拡大していることに対応する狙いだ。

同社は蘇州マッコーニを中心に日本、米国、欧州向けのドレス、ブラウスを中心とした中高級ラインのOEM（相手先ブランドによる生産）、ODM（相手先ブランドによる設計・生産）を手掛けている。蘇州拠点は現在八百人の規模だが、「ほかの工場にはない機能」（曾藝文社長）というのがサンプルセンターを含めたR&D（研究開発）部門で、約二百人を配置している。R&D部門の主要人員はパタンナーが日本人四人と中国人約二十人、サンプル縫製が約六十人、貿易業務を含めたMD担当が約五十人。現状ではサンプルを一カ月約一千五百枚生産しているが、生産が追いつかず、一年後には約三百人体制にする計画だ。

欧州ブランドとの取り組みはこういう流れ。蘇州マッコーニはブランド側がトレンドを決定した段階で打ち合わせ、素材・資材などを集めてプレゼンを行う。そこからブランド側のデザイナーがピックアップし、スケッチを持って蘇州を訪問、工場のパタンナーと話し合い、ファーストサンプルを作成する。その一カ月後、ブランド側のデザイナーがチーフパタンナーと一緒に再び訪れ、製作したサンプルでフィッティング。OKとなるとそのまま展示会サンプルの製作に入る。

パターン、サンプル機能を強化する蘇州マッコーニ

「もともとこの仕事はアパレルが社内でやっていたが、今は工場と組んでやるようになった。時間短縮に有効で、コストも抑えられる。我々はブランドのプライスターゲットも理解しているから、仕様についてもコストアップになるとか、コミュニケーションが取れるし、検討が終わるとすぐ量産に入れる」。曾社長はこの仕組みが効率的で将来性があるという。欧州と日本ではMDと生産方法が違うが、今後のアパレル生産のあり方にとって参考になる。

マッコーニホールディングスは欧州向けが六〇%、米国向けが三〇%、日本向けが二〇%で、協力工場を含めた年間生産量は約二百五十万着。昨年十二月に上海の日系三工場を傘下に入れ、日本向けの比率も高まった。

「蘇州は量産機能を備えたR&Dの拠点」（曾社長）としていくが、COSをはじめ、欧州ブランドの受注が拡大する見通し。このため中国一極集中のリスク分散や、二〇一五年のASEAN（東南アジア諸国連合）経済統合のメリットを見据え、第一弾として今秋から協力工場によるベトナム生産もスタートする。